The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	映画『アナと雪の女王』に見る自己愛的な対象関係とその意識化に関する臨床心理学的考察
Author(s)	竹田, 駿介
Citation	大阪大学教育学年報. 2016, 21, p. 43-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57412
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

映画『アナと雪の女王』に見る自己愛的な対象関係とその意識化に関する臨床心理学的考察

竹　田　駿　介

要旨

映画『アナと雪の女王』“*Frozen*”の登場人物である、アナとエルサに見られる自己愛的な病理の発展過程を物語の展開に沿って考察した。Britton（2003）が児童期のコンテイメントの不在の体験様式の違いによる、成育史も踏まえた自己愛の類型を作成している。Britton（2003）の類型に沿って、アナはリビドー型自己愛、エルサは破壊的自己愛に相当する自己愛の様式を持っていることを明らかにした。

加えて、アナとエルサが「真実の愛」とは何かを体験することで、それぞれの自己愛の様式が意識化されたことを示す。その「真実の愛」について、Bion（1963）のコンテイナー/コンテインドモデルの観点から、「真実の愛」を臨床実践に応用するためには心理療法家にどういった態度が必要かについて臨床心理学的に考察した。その結果、クライエントの求める自己愛的な関係性に注意しつつ、心理療法家が自身の原始的な超自我をワークスルーしてそれを示すことが、「真実の愛」へと発展し、“Frozen”な状況を改善する一助となる。

1. 映画と精神分析の関連―なぜ映画なのか？―

映画は、社会心理学において、主に３つの方法にのっとって研究が行われている。１つは人気映画の研究、もう１つは映画としてその時代に共通して登場するテーマの研究、最後に、作成した映画の芸術家の心理の研究という視点である。この中でも、１つ目と２つ目には、精神分析理論が多く用いられている（波多野，1957）。Metz（1977）によれば、映画を観に行きたいという欲求は、産業映画によって生み出されたことの反映である。しかし、それと同時に、その欲求は、映画には観客に内在化してきた心的な仕組みが示されていることも意味すると指摘している。つまり、集団的側面と個人的側面、社会学的側面と精神分析的側面がわかち難く結ばれているのである。また、映画を観るという行為自体が、精神分析で扱う無意識の水準での夢をみることに類似しているという指摘もある（伊集院，2011）。

小林（2002）は、私たちが映画を見るとき、映画館の闇の中でスクリーンに向かって投影されるのは、連続した映像だけでなく、私たちの無意識の夢も投影していると指摘している。そのため、映画は現代の社会において、神話性をもった夢として存在している。

以上より、映画を精神分析的に読み解いていくことで、私たちが映画に投影した無意識的な夢を読み解くことが可能ではないだろうか。また、個人的な夢に留まらず、ヒットした作品を読み解いていくことで、その時代の人に強く内在化している心的な仕組みを読み解くことが可能なのではないだろうか。現代の人の中にある心的な仕組みを理解することは、臨床心理学実践の一つである心理療法において、クライエントの理解の一助となるものである。

この前提を踏まえ、以降の論を展開していくことにする。

2. 映画『アナと雪の女王』について

今回、人気映画として、『アナと雪の女王（原題Frozen)』を用いることにした。この映画は、日本では2014年３月に公開され、2014年度の興行収入は254億8000万円に及ぶ。2014年度の洋画の興行収入が863億1900万円であり、この作品のみで全体の３割に及んでいる。また、アカデミー賞を受賞した（歌謡賞）“Let It Go”の日本語訳のフレーズ「ありのままで」は流行語大賞に選ばれるなど、日本に社会現象を巻き起こした作品である（高柳，2015)。

上記のことを踏まえると、人気映画として呼ぶに、相応しい作品であると考えられる。この映画を題材として、主人公であるアナとエルサの自己愛的な精神力動を中心に見て行きたいと考えている。しかし、その関係上、どうしてもある程度ストーリーを把握している必要があるため、今一度ストーリーについて確認したい。

～Story～　前半

雪や氷を生み出し、触れたものを凍らせる魔力を持って生まれたアレンデール王国の王女エルサは、８歳時、深夜こっそりと妹のアナと魔法で雪を降らせて遊ぶ。その時に、誤ってアナの頭に魔法を当ててしまい、アナは意識不明に陥る。助けを求めるエルサの声を聞き、慌てて両親が二人をトロールの所へ連れて行き、アナは回復する。しかし、その代償として、エルサの魔法に関する記憶を失ってしまう。エルサは、“悪い感情に飲み込まれて魔法を使用してはならない”とトロールに強く注意を受ける。

年齢と共に強力になる魔力を制御出来なくなったエルサは城に閉じこもり、誰とも接触せずに生きていくことを選択する。一方アナは、突然姉が自分を避けることになったことを理解できずに、閉ざされた城の中に独りでいることを強いられる。その事件の10年後（エルサ18歳時)、両親を海難事故で亡くす。

それから３年後、成人となったエルサ（21歳）は、女王として即位することになり、13年間閉ざされたままだった城が開かれ、戴冠式が行われる。この頃、エルサの魔力は完全に制御不能の状態になっており、感情を押し殺して、その日をやりすごすことのみを望むエルサ。一方アナは、13年ぶりに外界と接触できることを喜び、運命の人と出会いを夢見ていた。アナは、戴冠式の前に隣国の王子ハンスと偶然出会い、その日のうちに婚約する。戴冠式のパーティーでアナはエルサに婚約したことを報告するが、エルサの反対にあい、二人は口論に。口論の最中、エルサは思わず魔力を暴発させてしまう。それを見た聴衆は、彼女はモンスターだと恐れおののく。エルサはその状況に耐えかね、王国から逃げ出す。そして、魔法で氷の城を建て、独りで生きていくことを決意する。

暴発した魔法は、収まる所を知らず、アレンデールに、止むことのない雪嵐が吹き荒れ、終わりのない冬がきてしまう。アナは事態を収拾するために、ハンスに国を任せ、エルサを連れ戻すための旅に出るのだが…。

3. 二人の差異について

ここで、ストーリーを一度区切り、二人の対照的な心の動きについて考えてみたい。筆者はこれより、自己愛的な病理の一形態として、児童期のコンテイメントが不十分であったことから、自己愛的な問題が発生すること、そして、その体験様式の違いによって、主とした自己愛的な様式が異なることを描写していく。

アナとエルサは共に、13年間引きこもりの状態であり、両親の死別を経験しているが、二人の心の動きは対照的である。戴冠式の直前２人が歌う、“For The First Time In Forever”（Anderson-lopez, Kristen /

Lopez, Robert, 2013）という曲の中で、アナとエルサの戴冠式へのそれぞれの思いを述べている。アナは “I won’t be alone. I can’t wait to meet everyone! What if I meet... the one?” と歌い、孤独から解放される喜びを表し、戴冠式を理想化している（英語のニュアンスを尊重するため、原文の歌詞を載せることをご容赦頂きたい）。一方エルサは、“Be the good girl you always have to be.” と自己を抑圧し “Make one wrong move and everyone will know.” と他者に見つかり、魔法が国民に知られてしまうことを非常に恐れている。このような差異はどのようにして生じたのだろうか。

これは、彼女らが 8 歳時に体験した事故の体験様式が、二人の差異を象徴していると筆者は考える。二人で遊んでいる最中に、アナの頭に魔法を当てて意識不明に陥らせたことは、大好きな妹を殺してしまったのではないかという恐怖を生起させるに十分なものであったのではないか。彼女の恐怖は想像を絶するものであったのだろう。その体験から、彼女が対象と関係を持つことは、対象を傷つけ、殺してしまうという確信を生起させるものとなったのではないだろうか。

もう二度と大切な人を傷つけないために、彼女は城に閉じこもるという生き方を選択したと思われる。これは、彼女が大切な人を殺せる能力があることを認識するのは、あまりにも苦痛で耐えられないためではないだろうか。その認識によって心的破局を防ぐために、誰とも関係を持たない、関係性を破壊するような方法に頼ることになったと推測できる。

エルサの内的世界は、感情を表に出してはならない、対象と接触してはならないという迫害的な超自我に支配され、依存したい気持ちは、抱くことすら許されない状況にあったのだと思われる。けれども、そういった引きこもりは、外的な要因とともに維持できなくなる。彼女が妹に王女の役割を譲らず、引き受けたことは、迫害的な超自我ゆえであると筆者は考える。ひきこもりを止め、外界に接触する必要が生じた際、エルサの中に自身を受け入れて欲しい気持ちが出てきたであろうことは想像に難くない。エルサの中の依存したい気持ちが強く表出されると、迫害的な超自我は外界に投影され、“Make one wrong move and everyone will know.” という歌詞に見られるような迫害不安に転じる。

一方、アナはこの事件の記憶は、消えてしまっている。彼女が覚えていることは、大好きな姉がある日突然遊んでくれなくなったことだけである。また、両親が海難事故で亡くなったことも先の事件と同様、エルサとは異なり、アナは大切な対象を失ったことについて一切責任はない。寂しさや不幸は、他者によって引き起こされたものと考えているために、自身の行動は問題とならないのである（実際は、事件の深夜、遊びに連れ出し、やや無謀な行動をしたアナをエルサは助けようと焦ったために事故が起きた。これらを踏まえると責任が全くないとは言い切れない）。また、アナは自身が受け入れられないことに関して、環境に対して無意識的に、強大な怒りを持っていたと推測できるが、劇中では明らかになっていない。エルサの氷の魔力は二人の怒りを象徴していたものかもしれない。両親はエルサの魔力のことを知っており、アナには伝えていない。自分には何かが隠されている、自分だけ知らされていないものがあるという無意識的な感覚も、アナの孤独感を強めていたのかもしれない。

そのため、自らが決して得ることが出来なかった愛情を与えてくれる運命の人がいつか現れ、この世界から連れ出してくれるという自我理想を持つことによって、アナは寂しさに耐えてきたと筆者は考える。それは、戴冠式を極度に理想化していることからもうかがえる。

けれども、ハンスを運命の人とし、婚約を結ぶさまは、自己愛的な関係性である。アナにとってハンスは、空想を現実化させる運命の人であり、その他の部分は、投影同一視が強く働き、外的対象と自我理想との相違は排除されている。“Love Is an Open Door”（Lopez, Robert / Anderson-lopez, Kristen, 2013）と言うタイトルにある通り、アナとハンスの間にある「愛」を、13年間閉じこもっていた城のドアを開けるものとし

て経験していることが考えられる。

物語が進むにつれて、アナが婚約したハンスは、王国の王位継承権を欲し、姉エルサを排除しようとする人物であることが、明らかになる。ハンスにとってのアナは自分が王になるための道具に過ぎないのであり、彼女の空想する運命の人とはほど遠い存在である。ハンスのそういった側面は、理想自我の投影同一視により、アナは気がつくことが出来ないでいる。ハンスもアナの投影を利用し、王位に近づくためにアナが求める理想の人物のように振る舞っている。

アナとエルサに共通することは、両親の不在や、一人で引きこもって生きてきたというコンテイメントが不在の状況である。エルサは、自己愛構造体を組織することで、感情を押し殺し、対象との関係を結ばないありかたを選択した。それとは対象的にアナは、自我理想（運命の人）が現われるという、自己愛的な対象を希求した。このような差異は、8歳の時点にみられた事故のように、本人の空想の中でどの程度攻撃性を認識しているか、またそれによってどの程度対象を傷つけたという認識があるかによって生まれると考えられる。

潜在的な自己の傷つきの防衛の様態によって、Gabbard（1994）が示した誇大型と過敏型の自己愛を分けるだけでなく、本作品のアナとエルサのように、それぞれの生育歴も踏まえた類型が可能ではないかと筆者は考える。Britton（2003）は、自己愛の様態を成育史も踏まえた類型として、破壊的自己愛とリビドー的自己愛に分類している。

Britton(2003)によれば、自己愛の障害は乳幼児期、もしくは児童期におけるコンテイメントの不全によって生じる。更に、コンテイメントの不全の主な要因が親側にある場合、主としてリビドー的な自己愛組織を形成し、乳幼児の対象敵意が過剰にある場合、主として破壊的な自己愛組織を形成すると指摘している。しかし、どちらもコインの裏表のような存在であり、容易に反転しうるが、概念上の整理をすることで、どちらがより大きな意味を持っているのか等、理解の助けになる。

このような分類は、筆者が読み解いてきた、アナとエルサの自己愛的な側面と合致する。アナは、両親の不在や、姉であるエルサとの突然の関係の断絶、コンテイメントの不全の主な要因は親側すなわち、他者にある。そのため、不全を解消するための自我理想的な対象（運命の人）を希求している。続いて、エルサは、対象敵意が過剰（この場合、触れるものを凍らせる魔力の存在がその象徴）なために、破壊的自己愛組織を形成している。主として形成した自己愛的防衛が固定化され、反転しないのは、お互いに異なる自己愛的な部分を投影し、相補的な関係になっているためではないか。

4. 破壊的自己愛から心的退避へ

次に、主として破壊的自己愛を形成し、迫害的な超自我のために関係を結ぶことが出来なかったエルサが、迫害的な超自我を外界へと投影し、心的退避（Steiner, 1997）へと退行する様子を描写したい。

エルサは、戴冠式で魔力が暴発してしまうと、国を去り、氷の城の中、一人で生きていくことを決意する。これは、8歳の時にアナを傷つけてしまい、城に閉じこもったことの反復である。感情を押し殺し、魔力を制御しようとも、心的現実は変化していないために、問題は再演される。

国を去る時に、有名な “Let It Go”（Robert Lopez, Kristen Anderson-lopez, 2013）をエルサが歌い、彼女の心中を吐露している。歌の内容は、いかに魔力を隠すことが難しく、そのための努力をしてきたということから始まる。そして筆者が述べてきた、迫害的な超自我は、“The wind is howling like this swirling storm inside.” のように心の中の嵐としてエルサに経験されているようである。内なる嵐をもう隠すことが

出来ずに、知られてしまった、今までの努力が全く報われなかったことに彼女は絶望している。“Can't hold it back anymore” ともう隠し通すことが出来なくなった怒りについて述べ、“Turn away and slam the door”と心的退避へと退行を決意する。アナが “Love is Open Door” と歌ったことと対照的に、彼女はドアを思いっきり閉め、誰とも関係を求めず、問題を外に投影し、内なる世界に閉じこもる。そして彼女は、心の中の嵐を外界に投影する。“It's funny how some distance makes everything seem small. And the fears that once controlled me can't get to me at all.” と言い、自分が住んでいた王国に、自分が抱いていた恐怖、努力が報われなかった怒りを投影し、自分はそれに煩わされることはなくなったと喜んでいる。

しかし、投影により問題を解消はできたものの、怒りや恐怖は心的現実から外界へ場所を移しただけであり、解決には至っていない。そのため、投影されたエルサの怒りや恐怖は王国に雪嵐として絶えず存在し、国民に猛威を振るっている。この投影された嵐は、アレンデールに終わりのない冬を引き起こした。エルサの13年間の怒りや恐怖は、同じ年月猛威を振るうことになったのだろうか。エルサは、ドアの向こうに引きこもり、投影した嵐と距離を取りながら、“Let the storm rage on.” と言っている。最後の “The cold never bothered me anyway” というエルサのセリフには、物理的な冷たさだけではなく、世間が受け入れてくれない冷たさや、エルサが隠そうと必死になっていた氷の能力の冷たさも含まれているのだろう。

エルサがこの歌を歌っていた時にオラフが誕生した点も興味深い。オラフは、８歳の時にアナとエルサが雪を降らせて遊んでいたときに作られていた雪だるまである。エルサにとって王国での過去は完全に悪いものではなく、妹との楽しい思い出や両親との良い関係性もあったはずである。それらを分裂排除して誕生したのがオラフではないかと筆者は考える。良い関係性も全て分裂排除し、エルサの心から取り去ってしまわなければ、恐怖や怒りから解放されなかった。

このように、エルサは、内的世界の怒りや恐怖、良い対象との思いを全て投影し、自身の心を過剰な投影により空っぽにして、やっと「ありのまま」と言えるようになったのである。しかし、この状況は「ありのまま」とは程遠い状況にある。

5. 物語の後半の確認

これまでに、自己愛的な防衛の発展過程を描写してきた。これより先では、後半の物語を確認し、いかにアナとエルサが自己愛の様相を抜け出し、そこに隠されていた潜在的な傷つきをワークスルーしていくかについて描写したい。そして、それが臨床の実践活動においてどのように利用できるかについて考察していく。

～Story～　後半

エルサを呼び戻すための旅に出たアナは、道中でクリストフ、彼の相棒であるトナカイのスヴェン、オラフと出会い、彼らと共に姉のいる氷の城を目指す。エルサは再びアナを傷つけることを恐れて拒絶するが、自分の魔法が王国に嵐を吹き起こしていることを聞かされ、ショックで魔法が暴発する。その暴発した魔法は、アナの胸に命中する。エルサと一緒に帰りたがるアナだったが、エルサが作り出した雪男により、クリストフやオラフと共に城から追い出されてしまう。追い出された後、アナの髪が白くなっていることに気付いたクリストフがトロールのもとに相談しに行くと、エルサの魔法によりアナの体が凍り付いてしまうこと、助かるには「真実の愛」が必要だと告げる。クリストフは婚約者のハンスからのキスが必要だと判断し、王国に戻ることを決意する。

ハンスは、アナの乗った馬だけが王国に帰ったことを不審に思い、自らエルサのところに行くことを決意。

氷の城でエルサを兵隊とともに攻撃しエルサを気絶に追い込み、王国へ連れて帰る。王国の牢屋にて、エルサに冬を止めるように命令するが、もちろんエルサは止めることが出来ない。そして、エルサは、また王国を傷つけることを恐れ、牢屋から逃げ出す。

アナが王国に戻り、ハンスにキスを求めるも、ハンスは拒否。この国の王になるためにアナを利用していたと告げ、弱っていくアナを部屋に放置する。城の側近にアナは死んだと話、エルサを反逆罪で処刑することを告げる。

クリストフは無事にアナを送り届けて安心するも、クリストフ自身がアナを愛していること、王国の様子がおかしいことから、王国に戻ることを決意する。オラフはアナの元にたどり着き、自分が融けてしまうのも気にせず、暖炉に火を熾し、愛とは自分よりも相手のことを考えることだと話す。クリストフがアナを愛していることを告げ、会いに行くように言う。

アナは、凍り付いた海の上でクリストフを発見する。しかし、同時にアナの死をハンスに告げられ、無抵抗になったエルサに剣を振り下ろそうとするハンスを目にする。アナは自分が助かる機会を捨て、ハンスとエルサの間に割って入る。そのときアナは完全に凍り付き、ハンスの剣を打ち破る。凍り付いたアナを見てエルサは悲痛な声を上げる。すると、アナの氷は融け、息を吹き返す。エルサは魔法をコントロールする方法は、相手を心から思いやる「真実の愛」であることに気が付き、王国を覆っていた氷や雪を元に戻す。王国に冬が終わったことでオラフは融けてしまいそうになるが､エルサがオラフの頭上のみ雪が降るようにし、オラフは融けずに夏を満喫することが出来るようになる。

ハンスは、アナから怒りの一撃をもらい、拘束され、王国へと強制送還させられる。その後、クリストフはアナの恋人になる。エルサは二度と城の門を閉ざさないことを約束し、城の広場で国民たちと魔法で作ったアイススケート場で楽しく過ごす。

6. リビドー型自己愛の意識化

アナは、エルサのいる氷の城を目指す途中、多くの仲間に出会う。その中でも、人間の醜さを認められない神経症的な男性クリストフとの出会いは、リビドー型自己愛を意識化させる役割を担っている。クリストフは “Reindeer(s) Are Better Than People”（Anderson-lopez, Kristen / Lopez, Robert, 2013）という歌で、人間の暴力を振るい、口汚くののしる側面を嫌い、シカの方がよいと歌っている。彼は自身の人間的なそういった側面を嫌悪し、シカのスヴェンを相棒として生活している。クリストフにとって、人と関係を持つということは自分の中に自身が嫌悪する怒りや攻撃性を生起させることになるので、人と関係を持つことは非常に怖いことであったのだろう。けれども、関係性を希求しており、シカやトロールと関係を持つことを選択したのかもしれない。そのため、自我理想のために人との関係を持とうと奔走するアナは、彼が最も希望しかつ恐れていることを目指す人物であるため、非常に羨望を刺激させる人物であったのかもしれない。疎ましく思いながらも、彼女が気になる存在として意識せざるを得なかったのだろう。

一方で、アナはそんなクリストフを氷の城に案内する人物という程度にしか考えていなかったのかもしれない。けれども、クリストフと交流していくことで、単に案内するだけの役割以上のものがあると認識するようになったのだろう。13年間城に引きこもり、内的世界の中のみで生きてきた彼女にとって、目的を達成させるための案内人に過ぎなかった存在が、アナに興味を持ち心配してくれる人物であったという体験は、不思議でかつ心地よいものであったと推測できる。この体験は、自分の心的現実の対象は、対象としてではなく、主体として存在するのだという驚きに満ちた発見となったかもしれない。Ogden（1990）は、心の発

達過程において、乳児の内的世界における対象は、対象自体としてのみではなく、主体としても存在しているという可能性の気付きは、他者の思いやりを認識するための条件であると述べている。アナは、孤独感を耐えるためにリビドー型自己愛を組織してきた。そのため、心の発達は非常に未分化で、Ogdenの指摘しているような段階であったのだろう。このような未熟で未分化な、ともすれば純粋とも言える側面は、人間の醜さを嫌うクリストフには魅力的に映っていたのかもしれない。

また、自分の理想を叶えてくれる存在であったハンスが、アナを自己愛的に利用している人物であったことも自己愛の解消に影響している。ハンスの存在によって、アナのリビドー的自己愛を組織し、いつか自分の理想を叶えてくれる人物が現れることを求める幻想では上手くいかないのだということを気付いたのだろう。

こういった体験をすることで、オラフが融けることも構わずにアナのために暖炉に火を熾した体験を便利な存在ではなく、思いやりを持って接してくれる存在として感じることが出来た。アナは、誰かが自分の理想を叶えてくれるというリビドー型の自己愛で自分を守ることなく、他者に受け入れられることを通して、相手を受け入れることを学んだ。こういったオラフの行為を内在化することによって、アナもまた、エルサの為を思い、行動することが出来たのだろう。対象が自分のために傷つきながらも主体性をもって助けてくれるというアナの気付きにより、罪悪感や償いという気持ちがアナの中に起こってくる。自分のせいで、他者が傷ついているという状況に目を向け、それでもなお他者が自身を気遣っているという場面は、償いの気持ちを生起させる。

7. 心的退避からの脱出と破壊的自己愛の意識化

ここでは、エルサが心的退避所から脱出し、破壊的自己愛を意識化する様子を描写したい。彼女の破壊的自己愛について考察する際に、エルサの氷の魔力について考えることが必要である。なぜなら、氷の魔力は彼女の攻撃性そのものであり、関係性を破壊し心的に退避するきっかけとなったものだからである。そのため、まずは彼女の氷の魔力について考察し、心的退避からの脱出について考察する。その後エルサの自己愛の意識化について描写する。

エルサの氷の魔力は、彼女の攻撃性を顕在化させたものであると考える。この攻撃性は、エルサにとって他者を傷つけるものであり、決して存在してはならないものであった。エルサはそれをコントロール出来ないという不確かさに耐えることが出来ないでいた。Britton（1998）は、不確かさに耐えきれない場合、不確かさを終わらせたいという願いから、病理的な抑うつポジションへと移行する様子を描写している。エルサにとって、それは心的退避として機能していた氷の城であったのだろう。自己認識や道徳的な正しさはある程度伴っていたとしても、そこには苦悩や喪失感は伴っていない。

アナは、エルサの氷の城の門を叩き、王国（現実世界）へと戻るように説得した。エルサは、一人で生きていくことを決めたのだと、アナに戻るつもりはないことを告げる。アナは、王国に雪嵐が吹き荒れており、状況を改善出来るのは、エルサしかいないのだということを話す。エルサは、病理的な抑うつポジションにより回避していた受け入れ難い不確かさへの恐怖を雪嵐として王国へと投影していたことを直面させられ、非常に動揺する。この動揺が、押さえつけていた魔法をコントロール不能にし、アナへと直撃する。8歳時に起きた事件の再演である。このことからも、エルサの氷の城に閉じこもり、誰とも会わないことを選択するという方法では、本質的な解決となっていないことがわかる。

この次に現れたのは、ハンス達である。エルサを無理やり王国へと連れ戻そうとする。ハンス達は、エル

サが雪嵐に怒りを投影していることに直面化したことと関連し、迫害不安を顕在化させるものとして体験されていたのかもしれない。彼女にとって、魔法は、他者を傷つけ殺してしまう可能性を持つものであり、制御できないこの力は押さえつけるしかないと感じられていた。そしてその魔力は、たびたび暴走し、実際に他者を傷つけ、人々に恐れられるものであった。雪嵐を解消させようと現われたハンス達は、報復に来た人物であるとも感じられたのではないか。

これは、エルサにとって、自分が国民に理解されなかった怒りの側面も投影されているように思われる。こういった一連の事件は、8歳時の再演であると考えられる。氷の魔力にまつわる事件は、8歳の事件以降、王国での魔力の暴発、氷の城での魔力の暴発と繰り返し、事件が起こるたびに、事態が悪化していくことを体験していた。自分が能力をコントロール出来ていないために、実際に人を傷つけてしまうという現実は、彼女が現実的に迫害されるという可能性を含むことだったに違いない。ハンスにより、王国へと拉致され、鎖につながれる様子は、彼女の苦しみを象徴するものであるかもしれない。現実では、彼女を受け入れる存在はおらず、城の中で繋ぎ止められるしかないのだという確信を生起させるには十分だったのだろう。彼女は、人を傷つけてしまうという問題を回避するために、氷の城に籠った。彼女は、事件の後、城で自身が犯してしまった攻撃や、また同じことを起こしてしまうかもしれないという恐怖を抱えたまま一人城の中で生きるしか道はないように感じている。そうなれば、誰のことも気にせず、一人だけで氷の世界で生きることを望むさまは、無理のないことだったのだろう。

そのため、再び氷の城へ戻ることを決意する。しかし、病理的な抑うつポジションへの退行では、彼女の他者から認められない苦しみ、受け入れられない怒り、悲しさ、孤独感、魔力をコントロール出来ない自分を許せない気持ちなど、様々な葛藤は回避されている。この段階で、まだエルサの破壊的自己愛は意識化されていない。彼女の意識化を助けになったのは、アナの自己犠牲的な行動であった。

アナが身を挺してエルサを救った時に、エルサは悲痛な悲鳴を上げ、アナが息を吹き返した。これにより、エルサは、魔法をコントロールする方法は、相手を心から思いやることだという気づきを得る。ここにはどういった力動が働いていたのであろうか。これには、氷の魔力が関係しているように思われる。他者を傷つけてしまうことを恐れるという側面を先に指摘したが、これには健康的な側面も含まれていたのと考える。なぜなら、他者を認識しており、自分とは異なる人間であるということを認識しているためである。他者に対する攻撃性をコントロール出来ない恐れが病理の中心であり、攻撃性を象徴する魔力ではないのである。自分自身の攻撃性を認識することは、逆説的に他者に思いやりを持つことになると祖父江（2008）は述べている。以下、祖父江（2008）の引用である。

> 『私たちは、自己の弱さを知り、それを自らいたわることが出来るようになって初めて他者に対しても優しくなれるのではないだろうか。私たちは自らの理想通りの人間にはなれないし、他者もまた自らの理想通りの人ではないという、限界をもった人間同士なのである。そうした自己と他者の限界を知り、その限界からくる喪失感（失望や落胆）を受け入れられることによって、私たちは人間的な優しさの成熟過程の道へと付くことが出来ると言えよう。』

エルサの現状とは、寂しさや落胆を伴うものであり、度重なる再演が示唆しているように、万能感を持って解決できるものではなかった。攻撃性の象徴である、コントロールできない氷の魔力の存在を認め、自分がコントロールできないという弱さを認めることは困難であった。しかし、そういった自分の状況を心配し、いたわってくれるアナの存在を通して、エルサ自身の弱さを認められるようになったのかもしれない。そし

て、それは他者の弱さへの共感や、いたわりへと繋がり、「真実の愛」という気づきを得たのだろう。これにより、エルサの中にあった、恐怖を受け入れることができ、妄想的に自身の氷の魔力を恐れるのではなく、現実感を伴った危険性の認識に留まることができたのではないか。こういった攻撃性は誰の中にもあり、限界をもった人間であるという気づきを得たのかもしれない。そのため、怒りや恐れの投影だった雪嵐を解消させることが出来た。しかし、その過程で良い関係性の象徴として機能していたオラフが融けていなくなってしまわなかった。このことから、エルサの全てを外に投影しなければならなかった破壊的自己愛は意識化され、その影響力は弱くなったものの、万能感をいくばくか維持し、解消には至っていないことが考えられる。

8. 臨床実践における「真実の愛」と心理療法家の態度について

筆者は冒頭で、人気映画を分析することで、内在化している心的な仕組みを読み解くことが可能なのではないかと述べた。ここでは、映画でアナやエルサの自己愛傾向を意識するに至った「真実の愛」というあり方の臨床実践について考察し、自己愛的な問題を呈するクライエントに対する心理療法家の態度について述べる。

映画において、「真実の愛」とは、相手を心から思いやることだと述べられている。情緒的に相手を受け入れ、相手に思いを巡らせることが重要であり、ただ、行為をすればよいことではない。姉妹の自己愛の類型が固定化していたことは、お互いに異なる自己愛の側面を補完し合っていた可能性がある。２人の「真実への愛」への至る過程が、心理療法家に求められる態度に近いものかもしれない。「真実の愛」は、キスが象徴するものではなく、他者が相手を思う行動に宿るのである。

Bion（1963）は、セラピストとクライエントの関係性について、コンテイナー/コンテインドモデルの理論を挙げている。コンテイナー/コンテインドモデルとは、赤ん坊が母親に投げ込んだ情緒について、母親がもの想いという思考機能を用いることによってその投げ込まれた情緒を理解し、緩和して赤ん坊に渡すことである。それにより、赤ん坊は自身が発生させた情緒を、実感を伴ったものとして扱えるようになると同時に、母親のもの想いの機能を取り入れる。これらを繰り返すことで、赤ん坊の能力が拡大し、一人で考える力を会得できるようになるとしている。

映画の例を見れば、アナがエルサを助けたことで、恐れや恐怖に関するコンテイメントが提供され、それをエルサが内在化することで、雪嵐として投影していた恐れをコンテインすることができた。また、アナがエルサにコンテイメントを提供することが出来たのは、オラフやハンスの影響を強いと考えられる。オラフは８歳の時に遊んでいた雪だるまが現実化したものであり、二人にとって非常に良い対象であることは間違いない。エルサにとってアナは傷つけたくない大切な存在であったのと同じように、コンテイナーとして機能するには、相手にとって良い対象であることが必要である。

しかし、この、コンテイナー/コンテインドモデルを自己愛的な問題を呈しているクライエントに応用した時に、セラピストが良い対象のコンテイナーとして機能するだけでは不十分である。このモデルは相互でお互いの役割を果たすことで、初めて成立するものなのではないか。すなわち、母親を、情緒を考える母親足らしめているのは、赤ん坊であり、赤ん坊の存在なしには、このモデルが完成することはありえないのである。破壊的自己愛と分類されたエルサは、氷の城の中に閉じこもり、対象と関わることを放棄していた。

臨床実践においては、一方的に行動を提示するのみでは不十分であり、相手にどう受け取られているかを考える必要がある。臨床実践の中で、相手に求められるものを察知し提供するだけでは、今回の映画におけ

るハンスのようになってしまう危険性を秘めている。セラピストの、クライエントの役に立てるという自己愛と、クライエントの自己愛を満たしあうことになり、本質的な改善は望めないままとなってしまうのではないだろうか。クライエントとセラピストとが自己愛的に融合することは、無意識的に病理と共謀することになり、その関係性から得られるものは、心理療法の効果とはかけ離れたものになる。これを回避するためには、セラピストは、セラピストとしての万能感を捨て、クライエントと共に現実と向き合うことが必要となる。コンテイナーとして機能するべき自身の無力感を認め、他者と目的を遂行しようとする態度が必要になってくる。

現実を見つめるということは、祖父江（2008）の先述の引用のように、自己の弱さを認識することを避けては通れない。万能感なしに、クライエントと現実を理解する体験は非常に痛みを伴うものであり、セラピストには痛みの中でなお考え、それを受け入れる態度が必要とされる。その姿は、アナが氷の城に閉じこもったエルサに王国の状況を説明し、戻ることを説得する様子に見られるのではないか。関係性を紡ぎだすには、エルサが如何に人と繋がり難く、失敗を繰り返し、それによってどんなに辛い思いをしてきたかということを理解することが第一歩となり、コンテイナーとして機能することが出来るのではないか。

しかし、アナの態度は、暴力的な侵入として経験されている可能性がある。エルサには、当初から、感情を表に出すことを禁じたり、対象と接するのを禁じたりするような迫害的な超自我が存在していた。アナが問題と向き合い、解決していこうとエルサに話かける様子は、状況をコントロールするために様々なことを命じてきた原始的な超自我と同様なものと感じられたのだろう。それは、エルサの当初から存在した魔法を外界に出してはならないという原始的超自我がアナに投影された結果なのかもしれない。

これを面接状況において考えると、自己愛的な問題を呈している人物に対し、その問題について考えようとすることは、屈辱的に感じるか、迫害的に感じるかのどちらかであるように思う。それは、ハンスとアナの結婚を止めようとしたエルサの介入によって怒りを覚えたアナの反応や氷の城でアナがエルサを説得しようとした際にエルサが恐怖を感じたことからも見て取れる。そして、それらを繰り返している間に、セラピストの原始的な超自我が賦活され、クライエントが感じているようにふるまってしまう。セラピストに必要とされる態度は、この原始的な超自我をワークスルーすることではないだろうか。Caper（1999）は、蒼古的超自我に直面しても退避も逆襲もしない分析家の能力は、分析状況を現実に繋ぎ止め、無意識衝動と自分自身との関係を見ておくために必要な能力であると指摘している。

自己愛的な問題を呈するクライエントに心理療法を行うためには、セラピストが自分自身の中の原始的な超自我の怒りをワークスルーすることが重要であると考える。そしてワークスルーした体験を提示することは、クライエントの原始的な超自我を、ワークスルーする方法を提示することになるのではないか。その態度こそが、母親がもの想いという思考機能を用いることによって投げ込まれた情緒を理解し、緩和して赤ん坊に渡すことであるコンテイナー/コンテインドモデルを実践することになる。お互いの役割を担うことによって、この理論が実践に用いられると述べていたように、セラピストはクライエントによって、自身の超自我に取り組む機会を与えられる。それをワークスルーし、その姿勢を維持し続けることがコンテイナー/コンテインドの役割を形成する可能性をもたらすのだろう。クライエントの求める自己愛的な関係性に注意しつつ、万能感を破棄することが、「真実の愛」となり、“Frozen” な状況を意識化することが出来るのかもしれない。

9. 参考文献

Anderson-lopez, Kristen / Lopez, Robert (2013). For The First Time In Forever DISNEY MUSIC PUBLISHING.

Anderson-lopez, Kristen / Lopez, Robert (2013). Reindeer(s) Are Better Than People DISNEY MUSIC PUBLISHING.

Chris Buck, Jennifer Michelle Lee 監督　『アナと雪の女王』2013.

Cristian Metz (1977). LE SIGNIFIANT IMAGINARE, PSYCHANALYSE ET CINÉMA Union générale d'Editions.（鹿島　茂（訳）（2008）.『映画と精神分析―想像的シニフィアン』　白水社）

Gabbard, G.O. (1994). *Psychodynamic personality in clinical practice.: The DSM-Ⅳ edition.* Washington DC; American Psychiatric Press（舘　哲郎（監訳）（1997）.『精神力動的精神医学　その臨床実践 ｛DSM－Ⅳ版｝③臨床編：Ⅱ軸障害』　岩崎学術出版社）

波多野完治（1957）.『映画の心理学』　新潮社

伊集院敬行（2011）．中井正一の映像論に見られる精神分析理論的傾向について　島根大学法学部紀要言語文化科学編，30，pp139-157.

John Steiner (1993). Psychic Retreats: Pathological organizations in psychotic, neurotic, and borderline patients Tavistock Clinic c/o The Institute of Psycho-Analysis, London（衣笠隆幸（監訳）（1997）.『こころの退避　精神病・神経症・境界例患者の病理的組織化』　岩崎学術出版社）

小林康夫（2002）．映画　永井　均，小林康夫，大澤真幸，山本ひろ子，中島隆博，中島義道，河本英夫（著）哲学の木　講談社

Lopez, Robert / Anderson-lopez, Kristen (2013). Love Is an Open Door　DISNEY MUSIC PUBLISHING.

小此木啓吾（1981）.『自己愛人間―現代ナルシズム論』　朝日出版社

Robert Caper (1999). A Mind of Own-A Kleinian View of self and object Routledge, London, England.（松木邦裕（監訳）（2011）.『米国クライン派の臨床　自分自身のこころ』　岩崎学術出版社）

Robert Lopez, Kristen Anderson-lopez (2013). Let It Go DISNEY MUSIC PUBLISHING.

Ronald Britton (1998). BLIEF AND IMAGINATION Expolorations in psychoanalysis The Institute of Psycho-Analysis, London（松木邦裕（監訳）古賀靖彦（訳）（2002）.『信念と想像：精神分析のこころの探求』金剛出版）

Ronald Britton (2003). SEX, DEATH, AND THE SUPEREGO: EXPERIENCE IN PSYCHOANALYSIS Karnac Books Ltd., represented by Cathy Miler Foreign Rights Agency, London, England.（豊原利樹（訳）（2012）.『性、死、超自我―精神分析における経験』　誠信書房）

Rosenfeld, H. (1987). *IMPASSE AND INTERPRETATION: Therapeutic and Anti-Therapeutic Factors in the Psychoanalytic Treatment of Psychotic, Borderline, and Neurotic Patients* London: The Institute of Psycho-Analysis（神田橋條治（監訳）（2001）.『治療の行き詰まりと解釈　精神分析療法における治療的/反治療的要因』　誠信書房）

祖父江典人（2008）.『対象関係論の実践　心理療法に開かれた地平』　新曜社

高柳哲人（2015）.「アナと雪の女王」ヒットの秘密　キネマ旬報2015年３月下旬映画業界決算特別号　キネマ旬報社

Thomas H. Ogden (1990). The Matrix of the Mind, object relations and the psychoanalytic dialogue Jason Aronson Inc., c/o Mark Peterson and Associates, Colchester, UK（狩野力八郎（監訳）藤山直樹（訳）（1996）.『こころのマトリックス　対象関係論との対話』　岩崎学術出版社）

Wilfred, R, Bion (1963) Elements of Psycho-analysis. London: Heinemann (reprinted London: Karnac Books, 1984)（福本　修（訳）（1999）.『精神分析の方法Ⅰ』〈セブン・サーヴァンツ〉　法政大学出版局）

Narcissistic Object Relationship and its Awareness in "*Frozen*" as Considered from a Clinical Psychology Viewpoint

TAKEDA Shunsuke

Abstract

The present paper discusses the process of development of narcissistic pathology as observed in Ana and Elsa – the main characters of the movie "*Frozen*." Referring to Britton's (2003) narcissistic typology, which is based on the concept of lack of containment during childhood, the paper suggests that Ana has libido-type narcissism, while Elsa has destructive-type narcissism. In addition, we suggest that by experiencing what true love is, each of the characters becomes aware of her own narcissistic patterns of behavior.

Basing our arguments on some of the movie's scenes, we distinguish those kinds of psychological problems that these two types of narcissism cause. We arrived at the conclusion that because of her destructive narcissism, Elsa was unable to control her magic power. Ana, on the other hand, dreamed to marry a man excessively idealized by her libidinal narcissism.

We further refer to Bion's (1963) container-contained model to discuss the attitude a psychotherapist needs in order to apply "true love" in clinical practice. That is, he psychotherapist could constantly pay attention to the client's urge for narcissistic relationship and also work through the therapist's own primitive superego. This in turn could help the client work through his primitive superego on his own. That process may eventually evolve into "true love," which could melt any "*frozen*" psychotherapeutic situation.